

玉蜻考

館書圖京東

三	九	一		
五	六	六		
冊	號	架	函	類

集中マキヌナ小玉蜻コタマセマ珠蜻ジュセマなど書あるをむのよりカギロトカギロト

とつと心得トルキてフキ印本フキなど小もカカ世のふること學マナブはる人

考出カウシュツべきものモノとも思オモひをらざりラしをシ近チカき頃トキ玉蜻タマセマのカギ

口クチロロ小コあアらラざるザル確マカ據コトを得エたりリさてテ一の定マカおオきてテ熟マカ思オモ見ミ

るル小コ今イマまでマデあアれレいイとのノこコ、小コ心ココロのノつツのノごゴをヲ一ヒトことトをヲか

つツはいイふフかカしシみミをヲおオのノ今イマのノくク思オモ得エるルことトをヲわワれ

なナがガらラもモかカつツハハあアやヤあアみミ思オモふフことト小コなナむムありリけケるルさて

其ソノ謂イハれレをヲこコとトあるル小コまマづズ玉蜻タマセマ珠蜻ジュセマのノカカギギロロトトにニあアらラざる

證アキをヲ一ヒト一ヒトはハ辨ワカへヘ論ワタひヒてテさサてテ後ノチ小コそソをヲ訓ツケべベきキやヤうウをヲさサぶ

玉蜻考

めいさむとまづ其歌どもハ集中卷二長歌 七丁小天飛也
 云々玉蜻磐垣淵之云々同卷長歌 八丁小打蟬等云々珠蜻髻
カニダニモ鬢谷裳云々卷八三丁玉蜻蜓髻所見而別去者毛等奈
ヤコヒム也戀牟相時麻而波卷十五丁小玉蜻夕去來者佐豆人之弓月
ガタヘニカスミタナビク我高荷霞霏霏同卷九丁小皮為酢寸穗庭閑不出戀乎吾為
タビヒトノミ玉蜻直一目耳視之人故爾卷十一三丁小玉蜻石垣淵之隱
ニハフシテシストモナガ庭伏以死汝名羽不謂卷十二七丁小朝影爾吾身者成奴玉
ホノカニミエテ蜻髻髻所見而往之兒故爾と見えりさて正しくカギロ
ヒをよめるら集中卷一廿二丁小東野炎立所見而反見為者
ツキカクキス月覆卷二長歌 八丁小打蟬等云々蜻火之燎流荒野爾云々同

或本長歌 小云々香切火之燎流荒野爾云々卷六四十二丁長歌 小八隅
カギロヒノ知之云々炎乃春爾之成者云々卷九廿四丁小父母賀云々
カギロヒノ蜻蜒火之心所燎管云々卷十七七丁小今更雪零目八方蜻火之
モユル燎留春部常成西物乎など見えりこれらハさら小疑い
ナキカギロヒなきカギロヒなりさてその玉蜻珠蜻のカギロヒ小あら
ヨシざる謂と云ハまづ右小舉さる如く玉蜻珠蜻玉蜻蜓など
 やり小のみ書て玉蜻之珠蜻乃とやり之乃等の字を添
 て書るハ一もなく其次小舉さる方ハ皆蜻火之炎乃とや
 り小必之乃等の字を添て書りこれカギロヒ小あらざ
 る證の一なり但之等の字ハ略きて書る例も集中小多く
あることなればなほ疑ふ人もあるべけれ

玉蜻考

二

ども、あくきはやろふ。玉蜻の方よハ、之等の字を添て書る
ハ、つゝもなくして、炎の方よ、之等の字をそへて書ざるハ、
もなきハ、もとよりその差。さて蜻蛉ハ、虫の名なるよ、蜻蛉
をやめてカギロピと呼しことよはあらざ、カギロなりな
次よ、其、謂ハ右の如く、蜻火、蜻蛉火とのみ、火字を添て書
云べし。其、謂ハ右の如く、蜻火、蜻蛉火とのみ、火字を添て書
ざるハ、つゝもなく、玉蜻の方よハ、火を添て、玉蜻火と書る。つ
もなき、これ玉蜻のカギロピよあらざる證の二なり。蜻
やめてカギロピならむハ、火字を添。又玉蜻をカギロピ
あるハ、無用の長物とやいふべらむ。又玉蜻をカギロピ
とせむよ、甚も疑しきハ、玉蜻、珠蜻の文字なり。但し彼、蜻蛉
と云虫の眼ハ、透徹ること、珠玉の如くなる故よ、玉蜻と書
こと、心得まゝからぶみ、博物志と云ものよ、五月五日、埋

蜻蛉頭於西向戸下埋三日不食則化爲青眞珠といふこと
もあれバ、さる謂ふよりて書るならむと思ふれど、よく
考ふるよ、さまで巧よ思ひめぐらして、文字を造り成ること。
彼頃の人、の筆をさみよあらざ、あま、ハ、丸雪、青頭、雞な
どやうよ、書ることよあれど、其等ハ、あま、さ、近く、思ひ設
て書るものよ、てい、くこと、のさま、異れり、これ又玉蜻の
カギロピよあらざる證の三なり。さてかく思ひめぐら
て後、右よ、舉ぐる歌どもを、こと、く、相照し見て、熟考る
よ、玉蜻の方ハ、磐垣、淵ま、鬢、鬚ま、夕ま、直、一目とのみ
續き、炎之の方なるハ、燎流ま、春とのみ、續きて、玉蜻と、炎

とは混雑マギもなく、サダ詳明カは別れシり。これ玉蜻カギロのカギロとヒふ
あらざる證シの四なり。かくまできハヤカギルのカギロとヒふ玉蜻カギロのカギロ
とならぬことを正しく思ひ得てより、玉蜻をよむべきや
りを熟思シひめぐらじ。此をバタカギルと訓シべきこと
なり。いカギロのよとなれば、右小いふ如く、蜻火カギロ蜻カギロ火カギロなど書る。
其火字を省きをつる時ハ、蜻カギロハカギロなり。其ハ今世小
トンバカギルと云虫カギルよて、袖中抄ふカギルといへり。古名ハ阿岐豆カギルなるを
その一名カギルを加カギル藝カギル呂カギルと稱カギルしとたほえり。和名抄ハ、蜻カギル鈴カギル和
後カギルの稱カギルならむ。故蜻カギル蛭カギルハ玉字をそへて、夕カギルマカギルカカギルギカギルルカギルといふ
言の借字とせり。加カギル藝カギル呂カギルを加カギル藝カギル留カギルハ借カギルるハ、轉用カギルる古の

借字の一の例よて、香切火カギルと書ると同例なり。切をカギルこ
のこカギルとをカギルはやく古義カギルよくハカギルく論カギルへり。さて夕カギルマカギルカカギルギカギルルカギル
とよむべきことカギルのさらふ動カギルくまカギルどきカギルよカギルを云む。卷一
長歌カギル丁カギルハ偶知カギル之カギル云々玉限カギル夕カギル去來カギル者カギル云々。これを舊印本
とよめるハ、さらふ論カギルとあるハ、上カギルよ引カギルる。卷十五カギルハ玉蜻カギル
夕カギル去來カギル者カギル云々と全同カギルく續カギルきまカギルる。卷十一カギルハ真祖鏡カギル雖
見言カギル哉玉限石垣淵カギル乃カギル隱カギル而在カギル嬾カギルとあるハ、上カギルよ引カギルる。卷二
丁カギル七の玉蜻磐垣淵カギル之カギル云々。卷十一カギルハ丁カギル二の玉蜻石垣淵カギル之カギル云
云と全同カギルく續カギルきあるよて、さらふカギルりあるカギルい思ふべ
きことよあらず。然るを岡部氏のこれらの玉限を玉蜻
と書改カギルてカギルかカギルギカギルロカギルヒカギルとよみカギルるより、世の

ふることまぬびの徒もそれより従てさらは疑ふ色もなく
かのれも近くまで然のみ心得居りしを今思へば中々
小古書を護せりしことごとくいとも
ゆゑ、志くあさましきことゆゑありける。又卷十三九
靖島云々玉限日文累云々とあるも同語なり。この歌のこ
とわこれ必玉蜻の夕マカギルなる證の一なり。又卷十一
らむ。朝影吾身成玉垣入風所見去子故とあるハ上より引
下り。朝影吾身成玉垣入風所見去子故とあるハ上より引
る。卷十二丁廿七。朝影爾云々とあると一句一言あふこ
ともなき同歌なるをカギルといふ言小垣入と借て書る
なり。但し加藝留ハ藝の言濁音垣ハ清音なればいふ所
や思ふ人もあらむその人のさめふのつゝいふべし。抑
古ハ言の清濁こそきはやの小差別ありて正のりけれど。

借字ハ清濁のさみ小まどへ用ある例ありて集中小加
豆思加といふ地名ハ豆の言濁音なる。勝牡鹿といふ。又
庭多豆水を庭立水といふ。夕方設を夕方柱といふ。類
あれば今の垣の字も此等小准へて加藝小借するを知べ
く。且入のイの言ハ加藝の藝の餘韻小含まれば自ら垣入
ハカギルとなる理なり。然るをこの玉垣入をも玉蜻乃の
護言なること右の玉限をこれ玉蜻の夕マカギルなる證
玉蜻の誤ときるまひとし。集中多末加藝留とりは疑
の二なり。仮字書はせしハ一つもなけれは後來の人なほ疑
をのこさむことあり證を擧ぐ。大日本國靈異記卷上狐爲妻
令生子縁第二も載する。欽明天皇の御世三野國大野郡人

の歌よ古非波未奈和我戸爾於知奴多萬可岐留波呂可邇
美縁豆伊邇師古由惠邇とありこれハ上ヨ引多る集中卷
十二廿七朝影爾云々の歌と下句大方同トきと遙ハルカといひ
髣髴ホノカといへるのみの少異イサカハシるみて唯同トことなりある
をかく多萬可岐留と仮字書小せるりへたまぎれもなき
ことなりこれ玉蜻のタマカギルなる證の三なりかく考
へ出て見ればいさゝのようあがふべききぢなくさうぶ
さらふ動くべきことこりなきことよそありけるさての
く思ひ定て後よ語意コトノコトを思ひ設けむとせるふそは考へ得
むこといとものしきことなりそもく語の意を釋トクこと

ものしきことなるをまゝて枕詞の類ハあるの中ふとい
ふこのあきことふなむありけるさるハあゝ引の久のこ
のなどの類のむのゝより朝夕人の耳なれある枕詞をら
も其語のあゝいふ意ハあゝのふ知とる人なればまゝ
て其餘のまゝこゝ耳遠き枕詞の意ハ思得てむことこのあゝ
きまゝならぬやさるのらハこのタマカギルと云語も
いのなる所由ユエよてあゝいへるぞといふことハ知がこゝ
ども玉蜻をタマカギルとよまむことはさらふ疑まづも
なきことなりさういへど考得難トてあゝよもごりて
打捨おのむこととあゝのさぶふくちをけければこゝろみ

ふおのぶおもひよれるよきをいさゝこのこふ記カギおく
べし多萬といふ言の義ハ次小いふべし可岐留カギルハ炫カギルとい
ふなるべし凡て加我カガ加藝カギ加具カグ加宜カゲなどいふも皆同言小
て加我カガ欲布ヨクフ加藝カギ呂火ロヒ又火ヒ之迹ノカ具土グツチ神枕カミマク詞カ玉タマ影カゲとつ
ふなごも玉タマ護カガの炫カギくよカなり後ノチの歌ウタも夕日ユフヒ影カゲかげら
よめり可藝カギ呂火ロヒといふも炫カギる火ヒといふふて陽炎カガヒのきら
きらと炫カギくよカなりさて磐垣淵イハキリノとつゞくハカガ卷マク九ク見ミ者モノ玉タマ
藻鴨モカ散亂サンラン而シテ在此ココ河常鴨カヘノトヨメとよめるごとく磐垣イハキリのこみとる
淵ノ激ヒ落ツクる水ミヅ玉タマを真マコトの玉タマの如ノトシくとりなして玉タマ散亂サンランて炫カギ
く磐垣イハキリ淵ノとつゞきあるものと思オモへど淵ノハ志シづのなるを
むぬとくるものなれば激ヒる義カギよとらむこと相アヒ應マカざるの
たほよそ深コソき淵ノハ青アヲく透徹スるやうなれば玉タマ炫カギといへり
ときべきあさて多萬といふ稱ナをその本モトよ立タのへりてい

ふときと元來珠玉より出たる名小は非アラび美麗カガヒく清明サヤカな
るを賛タメいふ稱ナよして古事記コトヅケ小玉津寶タマツツホとあるも清明サヤカ小志
て美麗カガヒき寶ホをいへり其餘古語コノコト小多萬某タマンナニといへるみな
その趣オモなりさて珠玉も多末タマノとあへいふものの中の一
ながら珠玉タマハきはめて清明サヤカなる故ユ自然シラ珠玉タマの名ナの如
くなれるものなりされば透徹スりて清明サヤカ小炫カギく淵ノといふ
意イよつゞきともふてあらむの又夕ユフとつゞきとるハ夕陽ユフヒ
の清明サヤカ小炫カギく夕ユフと云意イよつゞきとるの又日ヒとつゞきと
るハ清明サヤカ小光ヒり炫カギく日ヒと云ならむのさて髣髴カガヒとつゞく
ハ即ナ玉タマハ珠玉タマの義カギよて明珠タマの光ヒハほのカガのカガるカガと

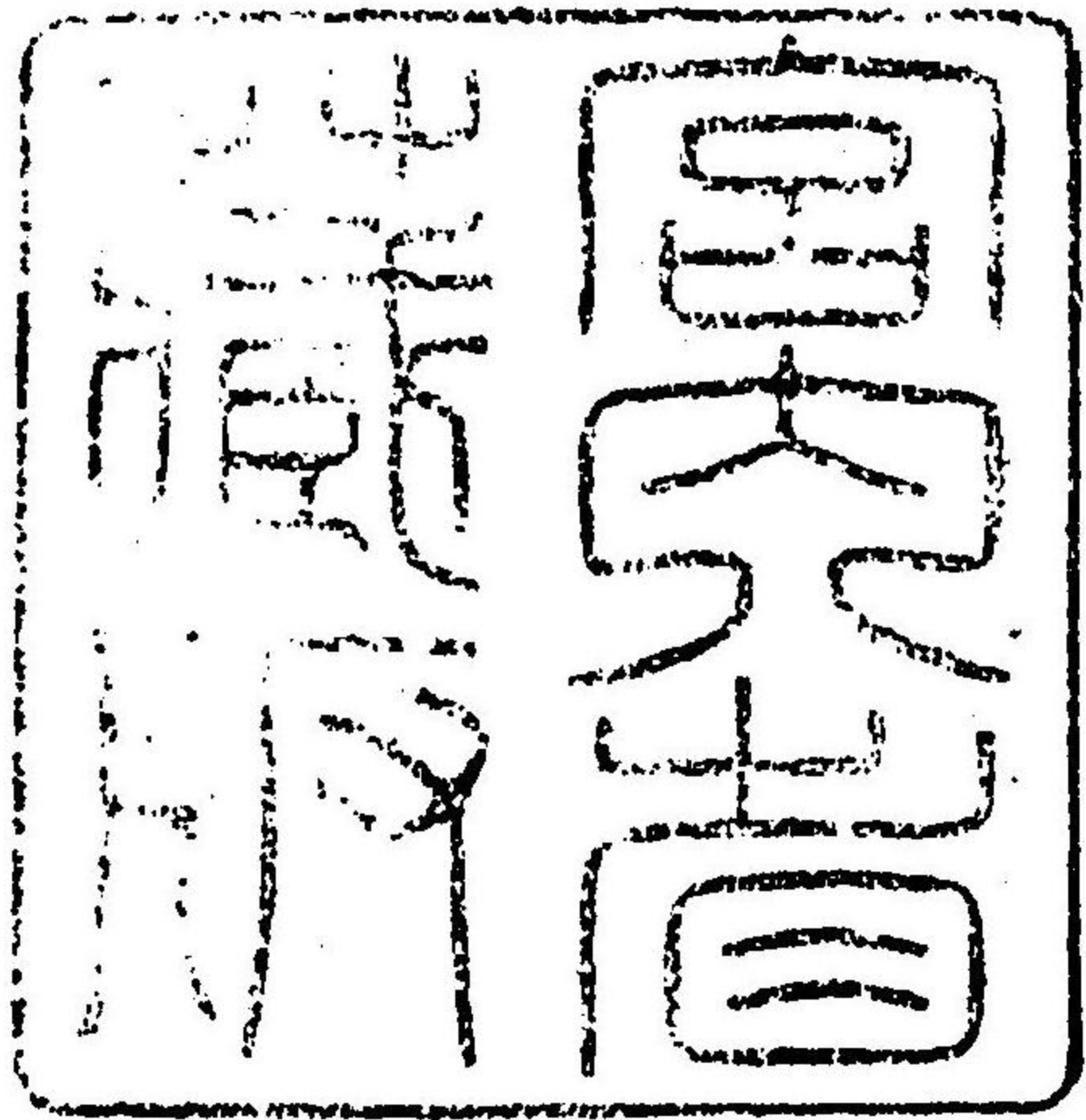
炫くよーふて、髻鬘とつゞきよるの、靈異記の歌小波呂可
とつゞけよるも同義なり。又直一目とつゞくも、明珠の光
ハ直一目見ても、灼イチレるきよりのつゞきよ。これらのことハ
なほよく更ふ考へ尋てむ。抑この玉可岐留タカギルの事たのれさ
き小南京遺響よ、靈異記の歌よつきていさゝのおもひよ
れるよーをのつゞいひいれど、なほ今の如くさぶの
ふ得思定めどして、なほふるき説よ拘泥ナヅミて、本編ふも物
おきこりつれば、今あくさらよ論辨へつるふなむ。

文政六年癸未二月九日春雨中稍得務間記之 藤原雅澄

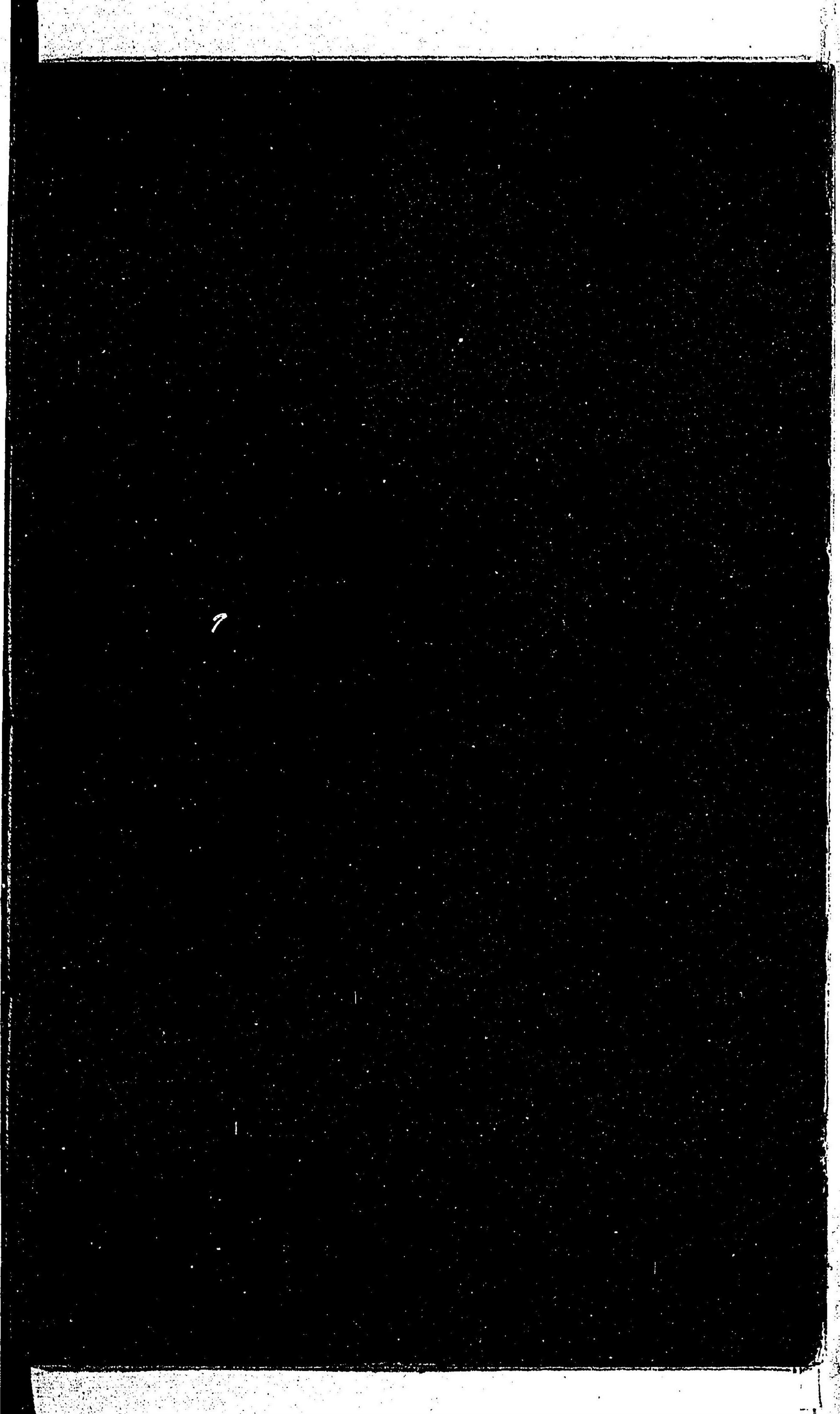
明治二十四年十月三日出版

宮内省藏版

明治二十七年十月
六日出版届



16
125
96





085854-000-8

16-96

玉靖考

藤原 雅澄 著

M24

DBD-0416



16
121
96

(M)

萬葉集古義

玉靖考